

前角博雄老師三回忌

ロスアンゼルス禅センター三十周年

横浜善光寺育英僧
ロスアンゼルス禅センター 遠藤博因

渡米四十年、アメリカの大地にて「禅」という種を蒔かれ育てあげた故前角博雄老師の三回忌が師の開創されたロスアンゼルス禅センターの三十周年行事と共に行われました。

去る五月十五・十六日両日、ロスアンゼルス禅センター佛真寺において二十周年記念式典及び、故前角博雄老師三回忌法要が厳修されるとともに、十七日には禅マウンテンセンター陽光寺においては、チャールズ天心・アネ清泉フレ

ツチャー夫妻による晋山式（新任職就任式）が執り行われました。今回、禅センターには、故前角老師の法嗣、デニス玄法マーゼル師ほか七名の法系者がアメリカ・メキシコより参列しました。

ロスアンゼルス禅センターは一九六七年、ダウンタウンより西へ七キロメートル程の住宅街において、一軒の民家より発足いたしました。

以来前角老師の人血惜しみない弁道のもと、主

に白人を中心とした参禅者の指導さらには後継者の育成に努められ、米国はもとよりメキシコ、ヨーロッパ諸国に十二人の法嗣を輩出されました。一九七〇年代には、参禅者の増加にともない土地や建物を拡張し、ノルマンディー通りの一ブロックをも占有し、実に百名余りのスタッフ及び二百名余りの住居者を擁護するまでに至りました。当禅堂では、月例の一週間の摂心をはじめ首座（雲水修行者の第一座）をたてた安居（九十日間の集中修行）が行われるなど、まさに日本の僧堂さながらの参禅修行が実践されて参りました。

また、さらなる本格的禅叢林・修行道場設立という強い参禅者の要望に伴い、ロスアンゼルス郊外東へ約三百キロメートルのサン・ハッシントン連峰の中腹（海拔一、六〇〇メートル）に、大自然の恵みに満ちた二十万坪の敷地に七堂伽藍建設の誓願が打ち立てられました。一九

七九年、多大な援助を惜しまなかった神戸・八王寺・故志保見道雲老師を開山に迎え、禅マウンテンセンター・陽光寺として開山されました。当初は、建物の基礎の上にテントを張った仮設禅堂にて摂心を行うなど幾多もの苦労を重ね、現在の百人以上を収用する座禅堂・仏殿・開山堂・庫院・典座寮他、大小の宿泊施設の完備に至っております。

現在、街のセンターでは前角老師に十年以上師事されたウエンディ恵玉尼、山のセンターでは法継者の一人チャールズ天心フレッチャー師と妻のアネ清泉尼が各センターの指導運営にあたっております。

亡き師徳ぶ三十周年

街の禅センターでは、まず十五日夕方より、前角老師の実弟・桐ヶ谷寺住職・黒田純夫老師による密湯をささげる逮夜式が執り行われまし

た。詰めかけた参列者は二階の開山堂から階下の座禅堂へ焼香の列をつくり、最後の焼香者が済むまで幾度となく般若心経を唱えるそのしめやかな雰囲気、眼を湿らせる参禅者の姿も多く見受けられました。

翌十六日は、八時半より玄法師による朝課が満場の参詣者が集う仏殿において行われました。引き続き、法要随喜者並びに参詣者は禅堂に移動、前角老師を偲んだ報恩坐禅を行いました。その後、当禅センター主事・恵玉尼が開口、随喜者に前角老師を偲ぶ話を請われました。まずはじめに、前角老師の実弟・善光寺住職黒田武志老師が、三十年前の禅堂設立当時を振り返り、前角老師とのエピソードを皆に話されました。続いて、黒田純夫老師より第一回安居について思い出を語られました。さらに、北米開教総監・秋葉玄吾老師より三十年の祝辞、及び故前角老師三回忌に因み、仏典からシーパン・ジ

ーパカの古則を引用し法話がなされました。この古則は、一つの胴体より二つの首が伸びる可憐なジューパカ鳥が互いの美声に嫉妬し、ある日一首の方が他方の餌にこっそり毒を盛ったという話であります。その悲しき愚かな結末をふまえ、秋葉総監は、師亡き後のサンガにおいて相互が協力和合しあうことの大切さを強調されました。引き続き、前角老師の法系者である獅心師から、禅センター初期の様子や御本人の体験談を頂きました。その後マイクは次々と禅センターのメンバーに渡され、各々の前角老師に対する思い出を語り合いました。

続いて、十一時半から、仏殿・須彌壇上に前角老師の位牌・遺影が設置され、黒田武志方丈を導師に迎え三回忌法要が厳修されました。導師の唱える英語による渾身の香語は堂内に厳肅さを加え、英訳参同契を全員で唱和して法要を厳かに執り行いました。



遠夜

報恩坐禪





三回忌法要会場に向う行列

フレッチャー夫婦の晋山式



お昼には、緑鮮やかな芝の覆う中庭にて、禅センターのメンバーによる手作りの中食が供養されました。また、隠寮（住職の住居）が一般の参詣者に開放され、居間の壁に展示された写真の数々はセンター三十年の歩みを克明に物語っていました。老師が書斎として使われていた部屋には、座右におかれていた祖祿、庭仕事に使われた麦藁帽、剪定鋏せんていばさみが展示され、感傷に浸る人の後ろ姿も見受けられました。

夕方六時より近隣のホテルの大広間においてバンケットが催されました。ここでは、センター創立以来のメンバー達や老師の知人等、百名余りの人々が参集し、三十年の歴史を振り返るスライドショーが上映されるなか、一同は思いの昔話に興じて、和やかな一時を楽しみました。

夫婦そろっての晋山式

翌十七日は前述のマウンテンセンターにおいて、晋山式が執り行われました。ロサンゼルスよりフリーウェイを東へ向かわせ、乾いた茶色砂肌の大地を走ること一時間半、さらに、サン・ハッシントン連峰へのきつい勾配の坂道を登ること小一時間、松の大木が林立するマウンテンセンターの境内に辿り着きます。今年折からの多雨のため下草が青々と生い茂り、近年まれにみる緑豊かな光景だそうです。まず午前十時半より隠寮において、秋葉総監・黒田両方丈の見守る中、陽光寺の寺印が玄法師から新命の天心師・清泉尼へと手渡されました。

次に、砂利道を登って山の斜面が切り開かれた前角老師の墓前にて、黒田武志老師を導師にけい塔諷経が営まれました。斜面に沿って白人の参詣者が黒の坐禅用の着物や作務衣を身にま



故前角老師の墓前

禅マウンテンセンターにて新命住職を中心に



とい焼香の列を作る姿は、故前角老師の無量なる御遺風の一面を感じさせられました。

さて、新命を率いた行列は諸堂の祭壇前にて香を焚きつつ巡堂し、大雷（太鼓）の鳴り響くなか人でびつしり埋まった禅堂へと上段しました。まず般若心経を唱和後、二人の新命は須彌壇上に拝上して垂語（新任職の決意表明）を垂れました。次に修行者らが新命の力量を問うために言う問答が開始され先の十問を清泉尼が、残りの十問を天心師が返答に立たれました。数ある問答の中には清泉尼に対し「二人が住職になつたら翌朝目覚めたときにはあなたは夫の天心師をどういう風に呼びますか？」という質問も飛び出し、満場を沸かせる一幕もありました。そして式は尊宿方々の祝語を以て次第し、無事円成いたしました。

その後、お昼は境内に円テーブルが並べられ、菜食のランチが供養されました。その席にて今

回ドイツ、エンシェンバッハ禅センター晋門寺より飛来された中川老師が祝辞を述べられました。天心師がイギリス出身ということもあり、マウンテンセンターが常にヨーロッパからの参籠者受け入れに積極的である事実をふまえ、人的交流の大切さを力説されました。

新たな歩み着実に

“ZEN”（ゼン）という単語がアメリカ社会に久しく膾炙されて以来、現在は、事実アメリカ人の師がアメリカ人に禅を語る時代といえます。最後の日本人の師と言われる前角老師が遷化されて三年の月日が過ぎました。しかしながら、今回二つの禅センターにおいて、ことに肯定的な局面を見て取ることが出来ます。街のセンターで老師の思い出を皆が語りあい、そしてその思い出をその場にいるもの皆で共有しあうという、そこには外見や見栄などにこだわらな

い、きわめて純粹で正直な人と人との交流と空間の分かち合いがもたらされるように思われました。

一 昨年のタイム誌 (Time Oct, 13, 1997) では、アメリカ仏教特集においてこの禅センターがとりあげられました。伝統的な座禅に加えて、参禅者が車座になりお互いの心の問題やサンガの運営について心を開いて語り合う機会を積極的にもうけていることが報道されています。昨今、心の癒しがアメリカ社会でも強く叫ばれています。禅仏教自体がアメリカ人の精神を深く支えるべく変容を余儀なくされていることが看取できると思います。

またマウンテンセンターでは夫婦による晋山式が行われた訳ですが、これはアメリカの禅堂を象徴する建設的な出来事でもあります。他にも夫婦で禅センターやグループを運営するところは多数あります。これは、そもそも男性、女性が同等に参禅修行を行う現代アメリカの禅の状況を省みれば、ごく自然の成り行きであるといえるのではないのでしょうか。

今回の両禅センターでの行事を通して、前角老師ご自身が禅がアメリカ社会に根ざす様子を遙か遠くから見守っていらっしやる気がしております。

合掌